フランス故事ことわざ辞典

田辺貞之助

フランス
故事ことわざ辞典

田辺貞之助編

白水社

編者略歴
一九〇五年生
一九二八年東大仏文科卒
文学・語学専攻
埼玉医科大教授
主要著書
「教養フランス語（全三巻）」
「現代フランス文法」他
主要訳書
クーランジュ「古代都市」
ユイスマン「彼方」
ゴーチェ「キャピテン・フラカス」
「モーパン嬢」「ミイラ物語」他

フランス故事ことわざ辞典

一九七六年四月一五日 印刷
一九七六年四月二八日 発行

編者 © 田辺貞之助
発行者 寺村五一
印刷者 山岸晟
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京 九一三三二八
郵便番号 一〇一

三秀舎印刷・加瀬製本

(分) 3585 (製) 01020 (出) 6911

まえがき

この本の原稿は、はじめはこういう体裁にすべて書かれたものではない。今までにフランスの小話や民話、伝説をいちおうまとめた関係で、そうした系列の一環として、諺や故事も欠くことのできないものと考えた。そして、馴染みの出版社の快諾を得たが、ぼくは従来の筆法にしたがい、いわば故事諺を骨とした随筆をまとめようと思い、フランスの小話や逸話や江戸川柳までも盛りこんだ。

原稿はそのために千数百枚の厖大なものになったが、ぼくはそういう本があってもいいと思い、敢えて出版するつもりでいた。ところが、石油ショックによる不景気の大波のために、約束していた小さな出版社へ厖大な原稿を持ちこむのが気の毒で、しばらく原稿を渡せずにいた。だが、『捨てる神あれば助ける神あり』の諺のように、このたび幸いにも白水社から出してもらうことになったのである。

だが、白水社からこういういかめしい表題で出すとなると、本の編集方針を全面的にあらためて、より学問的ないし語学的なものにしなければならなくなった。そこで、新しい方針に合わない個所を合計百数十枚にわたって削除し、巻末につけるはずだった名言集も、たとえば「わしらの羊のことに戻ろう」のように諺と化しているものや、ミュッセの「われはわが盃にて飲む」のような特に興味をひかれているものを除いて、全部抹殺した。そして、そのかわりに、いわゆる諺的成句を多量にあさって加え、どうやら『フランス故事ことわざ辞典』の体裁をつけた。

しかし、校正を読んで見ると、聖書でいう「古い人間」が、つまり前の編集方針の残滓があちこちに散在していたので、それを初稿でバサリバサリと切りおとした。まことに涙なきを得ない仕事であった。しかし、最後の校正をおわってみると、やはりあちこちの解説に小話や逸話がだいぶ生き残っていた。それを削除しようとすると、全体を動

かさなければならないので、余儀なく生かしておくことにした。そして少しく救われた気持になった。

こんなわけで、この本は在来の故事ことわざ辞典とは大変ちがい、かなりアマチュアリッシュなものになった。「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」というが、これも仕方のないことであるようだ。学者でもない、お脳のよわいものが学者らしい仕事をしようと思ったのが、そもそもの間違いだったのだから。

この本の編集で、ぼくがもうひとつ努力したのは、「死人に罪あり」に対する『死人に妄語』のように、フランスの諺とぴったりのものや、あるいは「酒が抜かれたら、飲まねばならぬ」に対する『差された盃は受けねばならぬ』のように、表現がよく似ている日本の諺を挙げて、フランスの諺の親身な理解をはかろうとしたことであった。

これは素人判断だが、諺とは言業（ことわざ）で、言葉のあやによりイメージをクローズ・アップさせて、いおうとすることを印象づける戯れだと思う。だが、そのイメージは国民性がちがえば、それに応じてちがうであろう。このちがいを比較対照するのは面白い遊びであるし、この比較対照からそれぞれの国民の精神および感情の傾向がうかがわれようというものだ。

もちろん、このことはこの本では十分に行なわれていない。それは紙数がゆるさないためでもあるし、比較諺学とでも題すべき別の本で、もっと科学的にやるべきことだからである。この本ではちょっとしたサンプルを示すことにより、読者諸兄姉にその方面に関心をもっていただく一助にしたいと思っただけであった。

とにかく、諺というものは日本でもフランスでも膨大な数だが、ぼくが困ったのは、その配列をどうすべきかということであった。辞典と名のつく以上、引きやすいものでなければならないからだ。自国の諺だと、アルファベット順やアイウエオ順ですまされる。それは諺の定形が、たとえば『鬼も十八、番茶も出花』や『柳の下のどじょう』のように記憶のなかにできあがっているので、難なく辞書が引ける。だが、フランスの諺を日本語に訳す場合には、どういう文章にするかは各自の勝手なので、訳文がまちまちにならざるを得ない。たとえば C'est le chant du cygne. にしても「白鳥の歌だ」と「それは白鳥の歌だ」のどちらに訳すかで、本のなかの場所がちがって来る。だから、下手な並べ方をすると、藪のなかへ迷いこんだようで、利用価値のない本になってしまう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ところで、この本の訳文については、なるべく原文に忠実にしようとした。たとえば Qui a bu, boira.（飲んだものは飲むだろう）はわかりかねるということなので「酒は一度飲んだらやめられぬ」としたが、仏和辞典で「恋は押しの一手」と訳されている Jamais lonteux n'eut belle amie. を、そのまま「はにかみ屋は美しい恋人をもてなかった」と訳した。そして、後に『一押、二金、三男』とつけた。この本をご利用になる方々はこういうぼくの流儀をまずご諒解いただきたい。

こういうわけで、引きよい本にすることが大問題だったが、ぼくは乏しい頭をしぼって、全体を三十余の大きい項目に分け、その項目をさらに小さい項目に分けてみた。この分類法はフランスでも日本でもあまり行なわれていない。フランスでは Pierre-Marie Quitard の『ことわざ辞典』がこの方法をとっているが、肝心の Homme（男）の項や Mari（亭主）の項がなかったりで、たいへん不便だ。そこで、ぼくは新機軸を出すことにして、足の踏み場もないほど、座敷いっぱいに原稿をならべて、どうやら分類したが、この分類法も万全を期しがたい。たとえば「嘘つきは悪魔の子である」というのを「嘘つき」の項に入れるか「悪魔」の項に入れるかという迷いがあった。またさらに、具体的なイメージを主にすべきか、その陰にある精神的なものを主にすべきかの問題がある。たとえば「溺れる者は自分の飲む水を見ない」という諺だが、これを海なり川なりの項目に入れるべきか「困窮」や「窮迫」の項目をつくってそれに入れるべきかで迷った。つまりイメージと精神の兼ね合いが頭痛の種だったのである。

だが、とにかく大小さまざまの檻（おり）をつくって、何千匹の諺という小鼠どもをうまくたらしこんだと思ったが、まだつかまえそこなったのや、たらしこみそこなったのがいくつかある。おこがましい文句だが、『上手の手から水が洩る』というわけ。そのひとつは、いまのぼくの実感である『群盲象を評す』だが、これはフランスのことわざ辞典にはないものなのであきらめるとして、もうひとつは『人を呪わば穴ふたつ』と訳されている Est pris qui a voulu prendre（瞞そうと思ったものが瞞された）である。人の馬をぬすんだものがその馬を馬市へ出した。そこへ持ち主が来て、いきなり馬の両眼を手でかくし、「この馬はめっかちなんだが、それはどっちの眼だ」ときいた。馬盗人は当てずっぽうに右の眼だと答えたが、持ち主が手をどかしてみせると、右の眼はちゃんとしていたので、左の眼

だといった。だが、左の眼もぱっちりしていたので、化けの皮をはがされたというわけ。

とにかく、三年にわたる仕事を終わって見て、ぼくはこの群盲と馬盗人の悲哀をつくづくと感じていると告白せざるを得ない。

昭和五十一年春分の日

田辺貞之助

追記――フランスの諺には脚韻を踏んで詩の形式になっているものが少なくない。この形式は見出し語としては尊重して、そのままにあらわしたが、〔解説〕の欄に出て来る場合や欧文索引では、印刷上の便宜から、行をかえずに、二行目以下のはじめに／を入れるにとどめた。

目次

一 宗教 一

1 神 一
2 女神 三
3 天使 四
4 聖者 五
5 僧侶 八
6 教会 一一
7 信仰 一四
8 聖水盤 一五
9 蠟燭(ろうそく) 一五
10 香・香油 一六
11 十字架 一七
12 数珠 一八
13 鐘 一八
14 祭り 一九
15 巡礼 二三

二 悪魔 二三

1 悪魔 二三
2 堕地獄の魂 二七

三 俗信 二七

四 天文 三一

1 天 三一
2 天体(太陽、月、星) 三一
3 天候 三三
4 時 三六
5 日々 三七
6 曜日 三八
7 年 三八
8 過去・現在・未来 三九
9 夜 四〇

五 自然 四一

1 火 四一
2 水 四三
3 氷 四四
4 大洪水 四四
5 川 四四
6 湖 四七
7 海・潮 四七
8 船 四七
9 山 四八
10 石 四九
11 木 四九
12 緑 四九
13 森 五三
14 藪 五三
15 とげ 五三

六 農村 五三

1 農民 五三
2 畑 五四
3 土地 五五
4 牧場・野原 五五
5 ぬかるみ・溝 五六
6 生垣 五六
7 風車 五六
8 花 五七
9 薔薇(ばら) 五七
10 サフラン 五八
11 麦 五八
12 藁(わら) 五八
13 草 五九
14 薪 六〇

七 騎士 六一

1 王 六一
2 貴族 六二
3 騎士 六三
4 武器 六四
5 戦争 六八
6 敵 六九
7 平和 七〇

八 社会生活 七〇
1 人生 七〇
2 世間 七一
3 時代 七一
4 進歩 七二
5 自由 七二
6 慎重・警戒 七三
7 疑念 七三
8 危険 七四
9 真理・真実 七五
10 正義 七五
11 規則 七五
12 約束 七六
13 ねたみ 七六
14 意見 七六
15 改革 七六
16 風俗の変遷 七七
17 流行 七七
18 善行・善意 七八
19 恩恵 七九
20 忘恩 八〇
21 生きる権利 八二
22 必要 八二
23 名誉 八二
24 強者 八三
九 処世法 八四
1 自業自得 八四
2 公徳心 八四
3 目的 八四
4 意図 八四
5 意志 八四
6 比較 八五
7 忠告 八五
8 忍耐 八五
9 侮辱 八六
10 誓い 八七
11 真実 八七
12 服従 八七
13 追従 八八
14 間違い 八八
15 第一歩 八八
16 時期 八八
17 小事が大事 八九
18 自立 八九
19 努力 九〇
20 沈黙 九〇
21 拒絶 九〇
22 判断 九一
23 無難 九一
24 長生法 九一
十 労働 九二
1 職業 九二
2 職業人 九二
3 職人 九四
4 勤め 九五
5 労働 九六
6 経験 九六
7 仕事 九七
8 有終の美 九八
25 隠棲 九一
26 六十の手習 九二
十一 言語 九九
1 言葉 九九
2 会合 一〇〇
3 多弁 一〇一
4 よい聞き手 一〇一
5 言行不一致 一〇一
6 悪口 一〇一
7 立聞き 一〇三
8 洒落(しゃ) 一〇三
9 青い話 一〇三
10 お国訛り 一〇四
11 便り 一〇四
十二 金銭 一〇四
1 商売 一〇四
2 損得 一〇五
3 金 一〇六
4 欲求と所有 一〇九
5 財布 一一一
6 貸借 一一一
7 金持 一一四
8 遺産 一一五
9 節約 一一六
10 値打 一一六
11 貧乏 一一七
十三 学者と賢者
1 学者 一一八
2 賢者 一二一

十四　芸能　一三三
1 芸術　一三三
2 演劇　一三四
3 音楽　一三五
4 道化師　一三七
5 トランプ　一三八

十五　スポーツと旅行　一三九
1 スポーツ　一三九
2 旅行　一三九
3 道路　一四〇
4 宿駅　一四一

十六　罪悪　一四一
1 悪人　一四一
2 博打(ばく)　一四三
3 罪　一四五
4 裁判　一四六
5 権利　一四八
6 懲罰　一四九
7 絞首台　一五〇

十七　家庭　一五一
1 わが家　一五一
2 父と母　一五一
3 兄弟　一五四
4 近親者　一五四
5 夫と妻　一五五
6 夫婦喧嘩　一五〇
7 娘・処女　一五一
8 婿　一五三
9 子供　一五三
10 教育　一五六
11 主人と召使　一五六

十八　友人　一五九
1 友人　一五九
2 友情　一六三
3 仲間　一六三
4 隣人　一六四

十九　男と女(一)　一六五
1 若さ・青年　一六五
2 男　一六六
3 恋する男　一六七
4 女　一六八
5 美女　一六六
6 接吻　一六八

二十　男と女(二)　一七八
1 恋愛　一七八
2 結婚　一八四
3 快楽と苦痛　一八七
4 嫉妬　一八八
5 情欲　一八九
6 虚栄心　一八九
7 老人の恋　一九〇
8 愛情　一九一
9 娼婦　一九二

二十一　個人生活　一九三
1 プライバシー　一九三
2 良識　一九三
3 自覚　一九四
4 自惚(うぬぼれ)　一九四
5 無為・暇　一九四
6 空想　一九五
7 無知　一九五
8 思い出　一九六
9 好奇心　一九六
10 趣味　一九六
11 習慣　一九七
12 はにかみ屋　一九八
13 中傷　一九八
14 嘲笑・軽蔑　一九八
15 怒り　一九九
16 喧嘩　一九九
17 復讐　二〇〇
18 嘘つき　二〇〇
19 噂　二〇一
20 引越　二〇一
21 笑いと涙　二〇二

二十二 身体 二〇三

1 身体 二〇三
2 頭・髪の毛 二〇四
3 顔 二〇五
4 眼 二〇六
5 耳 二〇八
6 鼻 二〇九
7 口 二一一
8 ひげ 二一三
9 舌 二一三
10 歯 二一四
11 乳房 二一四
12 肩 二一四
13 腕 二一五
14 肱 二一五
15 手 二一五
16 指 二一六
17 心臓 二一八
18 胃 二一八
19 脾臓 二一八
20 腹（空腹、満腹） 二一九
21 膀胱 二二〇
22 背中 二二〇
23 尻 二二一
24 足 二二一
25 かかと 二二二
26 生理現象 二二二

二十三 服装 二二四

1 服 二二四
2 外套 二二六
3 かつら 二二六
4 帽子 二二七
5 ズボン 二二八
6 ネクタイ 二二九
7 手袋 二二九
8 ハンケチ 二三〇
9 帯 二三〇
10 靴 二三一
11 靴下 二三二
12 シャツ 二三二
13 前掛け 二三三
14 よだれ掛け 二三三
15 糸紡ぎ 二三三
16 布 二三四
17 ラシャ 二三五
18 装身具 二三五

二十四 食事 二三七

1 食卓 二三七
2 料理 二三七
3 酒 二四〇
4 パン 二四五
5 小麦粉 二四七
6 スープ 二四七
7 チーズ 二四八
8 調味料 二四八
9 魚 二四八
10 腸詰 二四九
11 卵 二四九
12 果物 二五〇
13 野菜 二五二
14 菓子 二五四
15 食欲 二五四

二十五 建物 二五五

二十六 日用雑具類 二五七

1 籠 二五七
2 袋 二五八
3 捏（こ）ね桶 二五九
4 井 二六〇
5 樽 二六〇
6 瓶 二六〇
7 壺 二六一
8 甕（めか） 二六一
9 皿 二六二
10 箱・大箱 二六二
11 箒（ほうき） 二六三
12 提灯・ランプ 二六三
13 綱 二六四
14 棒 二六四
15 杖 二六四
16 物差 二六五
17 紙 二六五
18 石鹸 二六五
19 パイプ 二六五
20 ベッド 二六六

二十七 鉄および鉄器類 二六六

1 鉄 二六六
2 針 二六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

3 ピン 二六七
4 釘 二六七
5 ピンセット 二六八
6 錐(きり) 二六八
7 篩(ふるい) 二六八
8 庖丁 二六八
9 フライパン 二六八
10 金盥(かなだらい) 二六九
11 斧 二六九
12 鉄鎚 二六九
13 鉄床(かなとこ) 二六九
14 シャベル 二七〇
15 車輪 二七〇

二十八　禍福 二七〇

1 運命 二七〇
2 幸福 二七一
3 不幸 二七三
4 苦難 二七五
5 窮迫 二七六
6 希望 二七七
7 欲望 二七八
8 節欲 二七九

二十九　恵まれぬ人々 二七九

1 愚者 二七九
2 狂人 二八一
3 下種(げす) 二八一
4 乞食 二八二

三十　医療 二八三

1 医者 二八三
2 薬剤師 二八三
3 薬 二八四
4 健康と病気 二八五

三十一　生と死 二八六

1 生と死 二八六
2 墓 二九〇

三十二　地名と人名 二九〇

1 地名 二九〇
2 人名 二九四

三十三　外国 三〇一

1 アフリカ 三〇一
2 アメリカ 三〇一
3 イギリス 三〇一
4 イスラエル 三〇三
5 ギリシア 三〇三
6 スイス 三〇三
7 スペイン 三〇四
8 トルコ 三〇四
9 プロシャ 三〇五
10 モール人 三〇五

三十四　獣類 三〇五

1 けもの 三〇五
2 ライオン 三〇六
3 熊 三〇六
4 ラクダ 三〇七
5 狼 三〇七
6 狐 三〇九
7 猿 三一〇
8 牛 三一一
9 馬 三一三
10 驢馬(ばろ) 三一五
11 騾馬(ばち) 三一八
12 荷鞍 三一八
13 羊 三一九
14 山羊 三一九
15 角 三二一
16 犬 三二三
17 猫 三二四
18 鼠 三二七
19 豚 三二八
20 兎 三二八

三十五　鳥類 三二九

1 鳥 三二九
2 鷲 三三〇
3 のすり 三三〇
4 鶴 三三〇
5 白鳥 三三一
6 孔雀 三三一
7 鶯 三三一
8 だちょう 三三三
9 鳩 三三一
10 鶏 三三一
11 鵝鳥 三三四
12 七面鳥 三三五

13 鷸鴫（しぎ）　三三五
14 鴫（ぎ）　三三五
15 うずら　三三六
16 かいつぶり　三三六
17 雀　三三六
18 つぐみ　三三六
19 雲雀（ひば）　三三七
20 燕　三三八
21 かっこう鳥　三三八
22 烏　三三八
23 ふくろう　三三九
24 かささぎ　三三九
25 翼　三三九

三十六　魚　類　三四〇

1 魚　三四〇
2 鰊（にし）　三四〇
3 鰻（うなぎ）　三四〇
4 あなご　三四一
5 かわはぜ　三四一
6 四月の魚　三四一

三十七　鰐・蛇・蛙・こうもり　三四二

1 鰐（わに）　三四二
2 蛇　三四二
3 蛙・蟇（がま）　三四三
4 こうもり　三四三

三十八　昆　虫　三四四

1 蛆虫　三四四
2 のみ　三四四
3 しらみ　三四四
4 蠅　三四五
5 蜂　三四五
6 木くい虫　三四六

三十九　貝　類　三四六

1 牡蠣（かき）　三四六
2 貝殻　三四七

一　宗教

1　神

進退きわまった船には神が港を見つけさせる

A barque désespéré Dieu fait trouver le port.

【意味】人の援助のとどかないところでは、神が擁護を与えること。

【解説】いわゆる『天佑神助』というもので、ドイツでは「不幸が大きければ大きいほど神は近くにいる」といい、ギリシア人やラテン人は「神の思召しなら、君の船は柵のうえをも越えるだろう」といった。

【参考】しかし日本では『かなわぬときの神頼み』といいながら、『神も仏もないものか』と嘆くせりふがあるから、日本の神や仏はキリスト教の神より慈悲がうすいらしい。

毛を刈られた牝羊には神が風を加減する

A brebis tondue Dieu mesure le vent.

【意味】神の慈悲が臨機応変で、われわれに与えられた苦痛に応じてそのつぐないをしてくれることを示す。

【参考】これと同じ思想をフランスの諺は「神は野の雛を養う」Dieu nourrit les oisillons des champs.「神は服にしたがって寒さを与う」Dieu donne le froid selon la robe. ともいう。

神は小鳥の雛に餌を恵む

Aux petits des oiseaux Dieu donne leur pâture.

【意味】神の慈愛は広大で、あらゆる生物に及ぶこと。

神は三種の人間を助ける。狂人と子供と酔いどれ

Dieu aide à trois sortes de personne, aux fous, aux enfants et aux ivrognes.

【意味】この三種の人間はまるで神から特別の加護を加えられているように不幸や危険から守られるというのである。しかし、機械文明の極度に発達した現代では神の加護も用をなさなくなったらしい。

神が幸福を与えようとする者は若死にをする

Ceux à qui Dieu veut du bien meurent jeunes.

【意味】太古のギリシアの哲学者のなかに死を幸福と信ずるものが少なくなく、その思想をあらわした諺である。これに対して女流詩人サッポーは「死は不幸である。神々がそう判断された証拠に、神々は誰ひとりとして未だに死のうと望んでおられない」と反駁している。

神が助けようとするものは細君が死ぬ

A qui Dieu veut aider sa femme lui meurt.

【意味】細君が死ぬのが男にとってはもっとも大きな神の助けだという意味。これはフランスの男が看板にしているギャラントリーとはまったく反対であるが、いみじくもフランスの男の本心を暴露している。

【参考】同じ意味でフランスの諺は「細君と一ドゥニエを失うものには、大金の損害だ」A qui perd sa femme et un denier, c'est grand dommage de l'argent. という。一ドゥニエなんて端金をなくすほうが細君を失うより大きな損害だというのである。

神は形式主義者からわれわれを守る

Dieu nous garde des formalistes.

【意味】 形式主義者は形式と外観を第一とし、法律に違反せず、形式を侵害しなければ、何をしようと勝手だと恥じるところがない。形式主義のもとにどんな悪事が行なわれたことか。だから、形式主義者は警戒すべしの意。

神は三つのことを警戒させる。芥子(からし)をふらない牛の塩肉と、自分の姿に見入る下男と、白粉を塗りたくる女

De trois choses Dieu nous garde, de bœuf salé sans moutarde, d'un valet qui se regarde, d'une femme qui se farde.

【意味】 芥子をふらない牛肉がどんなふうに毒になるのか知らないが、自分の姿に見入るような、顔に自信のある下男は下女ばかりか奥方にも危険だろうし、白粉を塗る女は淫らな欲望をうちにかくしているのかもしれない。いずれも危険である。もちろんこの諺は白粉を塗ることが春を売る女にかぎられていた時代のものであろう。

銘々は自分のために、神は万人のために

Chacun pour soi et Dieu pour tous.

【意味】 人間は生きるためにめいめい自分のことしか考えず、他人のことは神にまかせている。

【解説】 人は誰でも自分の努力で生きなければならないのだから、これも余儀ないことで、エゴイズムというにはあまりにも本源的である。しかし、このエゴイズムが相よって成果をうみ、社会の進歩に貢献するのが今の世相である。近代文化の妙味はここにある。神は各人のエゴイズムを万人の幸福に利用していることになる。

人間が提案し、神が処置する

L'homme propose, et Dieu dispose.

【意味】 人間が企図することの成否は神の意志にかかっているの意。

【解説】 いかに周到な用意をもって計画しても、どこかに手ぬかりがあるものだし、将来の見通しに欠けるところがあるし、手段方法も限られているとなると、予期しない故障がおこって、目的の実現をはばまれることがある。だから事の成否は一切神の意志にかかっているというわけ。

【参考】『人事を尽して天命を待つ』

人間がいろいろ奔走しても、それをみちびくのは神である

L'homme s'agite, mais Dieu le mène.

【解説】 これは十七世紀の大司教フェヌロンの主頭節説教の一節で、「たとえ人間の情念が一切を決定するかに見えるときでも、神は自身の計画の道具となるに必要なものしか与えぬ。したがって、人間がいろいろ奔走しても、それをみちびくのは神である」とある。

神が小麦粉をおくると、悪魔が袋をさらう

Quand Dieu envoie la farine, le diable enlève le sac.

【意味】 これは古い諺で、有利な機会がおとずれたのに、邪魔が入ってそれを利用できないときに使う。

【参考】 イギリスでは同じことを「オムレツが降るとき、悪魔が皿をひっくりかえす」といった。日本の諺にすると『好事魔多し』に当たる。

神がとどろくのも聞こえまい

On n'entendrait pas Dieu tonner.

【意味】 「神がとどろく」とは雷が鳴るのである。辺りががやがやと物凄い騒ぎで、雷が鳴っても聞こえまいの意。

神は罪人の死を望まぬ

Dieu ne veut pas la mort du pécheur.

【意味】人の過失に対しては寛大にせよの意。

【解説】人は神の子であるから、どんな罪を犯したものでも、根っからの悪人であるはずがない。だから、キリスト教の裁判ではその者が悔い改めれば罪をゆるす。そして、人間の裁判がこれを死刑に処するという段取りになる。

神々は渇く

Les dieux ont soif.

【意味】ある思想や情熱に熱狂したものどもが、古代偶像教の野蛮な神々のように、際限もなく人民の血を吸おうとすること。

【解説】この成句はアナトール・フランスの同名の小説で有名になった。若い画工ガムランが狂信的な革命党員となり、血と恋とに狂う話である。

大きな神々にかけて誓う（約束する）

Jurer (Promettre) ses grands dieux.

【意味】大げさに神々に誓って厳粛に約束すること。

【解説】偶像教時代には種々雑多の神々がおり、そのうちには大小、軽重の差があったので、大きくて重要な神々の名にかけて誓うほうがもっともらしいと思われた。

神の観念は無限の観念のひとつの形である

L'idée de Dieu est une forme de l'idée de l'infini.

【意味】狂犬病の予防注射の発明で有名なルイ・パストゥールのフランス・アカデミー入会演説の一節。「世界における無限の観念、わたしはその避けがたいあらわれを至るところにみとめる。この観念によって、超自然はすべてのものの心の底にある。神の観念は無限の観念のひとつの形である。」

2　女神

誰の生涯にも運命の女神は一度微笑む

Chacun a dans sa vie un souris de la Fortune.

【意味】人間の生涯には少なくとも一度は運命の女神がおとずれて、幸運をさずけてくれるものだ。だが、そのものが女神の来訪にそなえて準備をしていないと、女神は戸口から入って窓から出ていってしまい、二度と姿を見せない。だから、万人心して女神の来訪に備えるべきであるというわけ。

幸運の女神の髪をつかむ

Saisir la Fortune par les cheveux.

【意味】幸運が向いて来たら機を逸せずにつかめの意。

【解説】ギリシア・ローマでは、幸運の女神は前額部にちょっぴり髪の毛があるだけで、他は全くのはげ、盲目で、両足に翼がはえ、片足を車輪に立て、片足を宙に浮かせて疾走する姿であらわされている。だから、幸運の女神が近づいたと思ったら、間髪を入れずにその前髪をつかまなければならない。一度やりすごしたら、うしろははげなのだから、つかまえようがない。

【参考】以上の伝説から、「運命の女神の車輪」La roue de la Fortune. は人生の有為転変を意味する。

運命の女神が唄ってくれる者はよく踊る

Bien danse à qui la Fortune chante.

【意味】何事を企てても具合よくいって、労せずしてうま

い汁を吸う人間を嫉妬していう言葉。

恩恵の女神へ盛り沢山の食事を供する

Apprêter la table bien fournie à la bonne Grâce.

【意味】 来客を厚遇し、山海の珍味を提供すること。

【解説】 これは元来恩恵の女神または幸運の女神のご最負にあずかるために美味な料理をそなえたことから来た。だが、この諺はさらにそうした女神たちの加護により気随気儘の安楽な生活をしているという意味にもつかわれた。

ヴィーナスが獲物にとりついて離れぬのじゃ

C'est Vénus tout entière à sa proie attachée.

【意味】 恋に魅入られた女ののっぴきならぬ愛欲のもだえをあらわす。

【解説】 ラシーヌの悲劇『フェードル』中の名せりふ。アテネの伝説的な王テゼの若き後妻フェードルが、先妻の息子によせた不倫の恋の物語である。表題のせりふはフェードルが恋を乳母に打ちあける場面で、恋愛の神ヴィーナスにみいられて、逃れようとしても逃れられない苦衷を訴えた。

ヴィーナスの帯

La ceinture de Vénus.

【意味】 異性を誘惑するすべての魅力を秘めている護符。これから魅力と優雅の表徴的源泉をいう。

【解説】 ボワローは『詩法』でこういっている。「ホメロスは、天性に教えられ、人から好かれんと、ヴィーナスの帯をぬすんだるごとくである。」また、ランベール侯爵夫人は「礼儀はヴィーナスの帯で、これを身につけるすべてのものを美しくし、優雅の趣を与える」といっている。

3　天使

天使のように書く

Ecrire comme un ange.

【意味】 申し分なく上手に文字を書く能筆をいう。

【解説】 しかし、天使が能筆であるとは聖書のどこにもないそうで、この天使とはアンジュ・ヴジェースという能筆家で、その名のアンジュが天使を意味するので、天使のようにとなったのである。アンジュ・ヴジェースはクレタ島の生まれでパリに来て、十六世紀のフランソワ一世に仕えて、公用書類のギリシア文字の印刷の手本を提供した。

【参考】 このことから意味がひろがって「天使のように話す、描く、歌う、踊る」Parler, peindre, chanter, danser comme un ange ともつかわれる。

紫色の天使を見る

Voir les anges violets.

【意味】 眼に一撃をうけたものについていう。

【解説】 この成句は眼を打たれたものは一瞬あたりが眩しく見えることや、打撲傷のあとが紫色に腫れあがることから来ており、さらに僧侶の服が一般に紫色であるばかりでなく、福音書作者聖ヨハネが黙示録で僧侶を天使になぞらえていることなどから、紫色の天使となったといわれる。同じことを今では「三十六の蠟燭を見る」Voir trente-six chandelles. という。

天使のために飲む

Boire aux anges.

【意味】 酒を自分の限度まで飲んでから、さらにそれ以上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.